

## 英国 NGS オープンガーデンのレジヤ性とチャリティー意識

- 下山田 翔（東海大学大学院 体育学研究科）  
萩 裕美子（東海大学 体育学部）

キーワード：オープンガーデン、レジヤ、チャリティー

### 1.はじめに

イングランドとウェールズでは、ナショナル・ガーデン・スキーム（以下 NGS）主催のオープンガーデンが毎年行われる。これは、庭園主が自身の私的な庭を公開し、自由に庭を鑑賞してもらうイベントである。年間で 3700 以上の庭園が公開され、英国ではポピュラーなイベントだと言える。しかし、誰でも庭園を公開できるわけではなく、NGS の審査を通過した庭園のみが公開を許される。NGS オープンガーデンは、1927 年に NGS 設立とともに正式に始まった。NGS のかつての母体組織である、女王の看護協会(QND)によって養成された女王の看護婦たちの退職金を工面するためのチャリティー事業として始まり、入場料や茶菓から得た収益を寄付に回す制度は現在も変わっていない<sup>1)</sup>。いつ、どこで、どんな庭園が公開されるかといった情報は、専門のガイドブックである「イエローブック」から得ることができる。

### 2.目的

本研究の目的は、英国 NGS 主催のオープンガーデンにおけるレジヤ性を、フィールドワークを通じて検討すること、ならびに、オープンガーデンにおけるチャリティーの取り組みについて、庭園主の意識を中心に調査することである。

### 3.方法

フィールドワーク部門は、2011 年 5 月 18 日と 19 日（2 庭園 2 庭園主）、2011 年 8 月 7 日と 8 日（4 庭園 4 庭園主）の 2 回行い、インタビューと観察を試みた。

#### 3-1.インタビュー

インタビューは庭園主に対し、以下の質問項目に対する答えを得ることを目的に行った。

- ①通算公開回数 ②1人で庭を手入れしているのか？ ③どのくらいの頻度で庭を手入れするか？ ④他の庭園主と情報交換するか？ ⑤オープンガーデンに取り組む動機

これらは、いずれもガイドブックからは得られないデータである。質問は、「⑤オープンガーデンに取り組む動機」に対する回答から、庭園主のチャリティー意識を探ることが核心であるため、①～④までの項目を対話の中に組み込み、漸次的に中心論点に迫るよう心掛けた<sup>2)</sup>。また、フィールドワークにおいてインタビューの機会は場所とタイミングを選ばず突然訪れ<sup>ibid)</sup>、会話の流れを妨げないことも重要であることから、すべてのインタビューにおいてすべての質問項目を質問できたわけではない。インタビューに対しては、研究目的で来訪したことは伝えたが、研究内容についての説明は避けた。

#### 3-2.観察

観察は庭園主、来訪客、庭園自体を対象として行い、以下の観点に関する質的データを得ることを目的に行なった。

- オープンガーデン中に庭園主や来訪客がどのような活動をしているか。
- オープンガーデンの雰囲気はどのようなものか。どのような演出がなされているか。

### 4.結果

本概要作成時には 1 回目調査しか終了していないため、2 庭園 2 庭園主のみに対する調査結果を報告する。

1 件目：1 件目の庭園はロンドン中心部に近い住宅街に位置し、広さは7×9メートルほどの小規模な庭園であった。庭園主はほとんど一人で庭の手入れをしており、ほぼ毎日水やりなど、何らかの作業をしているとのことだった。庭園公開動機を尋ねると、少し困った表情を浮かべた後に「チャリティーのためですよ、本当に。お金をもらって、その組織（NGS）にあげることです。」と回答した。

庭園は華美ではなく、こじんまりと整った印象を受けた。調査日は一般公開される日ではなく、個人的にアポイントをとって訪れたため、来訪客は本研究のみであった。公開日に多数の客が訪れたら、かなり手狭であると推察できる。

2 件目：2 件目の庭園はロンドン郊外に位置する大規模型の庭園であり、複数の庭園主が共同でひとつの庭園を公開するという、グループオープニングのシステムを採用している。そのうちの1人にインタビューすることに成功した。庭の手入れには庭師を雇い、庭園の公開は毎年の恒例行事となっているとのことだった。残念ながら、庭園主は他の来訪者を応対するため、オープンガーデンに取り組む動機は質問できなかった。

調査日は一般公開日であったため、多数の来訪客がいた。それぞれが花を愛でたり、知り合いと談笑したり、紅茶を嗜んだり、思い思いの楽しみ方をしていた。また、音楽隊が演奏を奏でいたり、鳥のさえずりがきこえたりと聴覚から得られる効果も特徴的だった。

## 5. 考察

1 件目では、動機について、「チャリティーのため」と回答し、本研究の質問に対し、困惑した表情を浮かべていたのが印象的だった。まるで、「そんなこと聞かれても困る」といったような表情を浮かべたあとに出た上述の回答からは、「ガーデニングや庭園公開の動機など普段考えもしない」のだろうという庭園主の心境が推察できる。ここからは、「何か目的があってやる」のではなく「それ自体のためにやる (for its own sake)」<sup>3)</sup>

という「自己目的的性格 (autotelic)」<sup>4)</sup>が感じ取れた。動機について「チャリティーのため」と回答した理由についてはもう一つの推測ができる。庭園主に「チャリティーの意識」が根付いているのかもしれない。困惑した表情の後に、絞り出すようにして出された答えは、「考えを及ばせてはみたものの、やはりそこ（チャリティー）に立ち返らざるをえない」といった、チャリティーが基本的な動機づけになっていることを示唆している。

2 件目では、動機についてうかがうことはできなかったが、庭園主が日常の作業について丁寧に語っていたことが印象的だった。草刈や今年の乾燥した気候に対する苦労などを説明してくれたが、それらの行動や苦心事態に魅力を感じ、尽力していることが感じ取れた。加えて、チャリティー制度についても丁寧に説明してくれた。また、庭園自体については、「演出すること」を強く意識した空間であると感じた。植物で囲われた道は迷路のような感覚を覚え、「この先はどうなっているのだろう」という好奇心を掻き立てられた。音楽隊の演奏は「普段とは違う体験」を来訪者に与え、その時間、そこにいる人しか味わえない経験の演出が、イベントとしての魅力を高めていたといえる。

## 6. 結論

- 庭園主にとってオープンガーデンは自己目的的性格の強いレジャーである。
- 庭園主にとってチャリティーはオープンガーデンに取り組む動機となっている。
- オープンガーデンは限られた時間と空間、非日常が演出されたイベントである。

### 引用・参考文献

- 1) 相田 明(2002), 英国ナショナル・ガーデン・スキームによるオープンガーデンの発祥と活動
- 2) ウヴェ・フェリック(1995), 質的研究入門, 春秋社
- 3) de Grazia(1962), OF TIME WORK, AND LEISURE, KRAUS REPRINT
- 4) M・チクセント・ミハイ(1975), 楽しみの社会学, 新思想社